

# 神神の微笑

芥川龍之介

青空文庫



ある春の夕ゆうば、 Padre Organtino はたった一人、長いアビトほうえ（法衣）

の裾すそを引きながら、南蛮寺なんばんじの庭を歩いていた。

庭には松や檜ひのきの間あいだに、薔薇ばらだの、橄欖かんらんだの、月桂げっけいだの、西

洋の植物が植えてあつた。殊に咲き始めた薔薇の花は、木々を幽かす

かにする夕明ゆうあかりの中に、薄甘い匂においを漂わせていた。それはこの

庭の静寂に、何か日本にほんとは思われぬ、不可思議な魅力みりよくを添え

るようだった。

オルガンテイノは寂しそうに、砂の赤い小径こみちを歩きながら、ぼ

んやり追憶に耽たっていた。羅馬ロオマの大本山だいほんざん、リスポアの港、羅面ラベ

琴イカの音ね、巴旦杏はたんきょうの味、「御主おんあるじ、わがアニマ（靈魂）の鏡」

の歌——そう云う思い出はいつのまにか、この紅毛こうもうの沙門しゃもんの心へ、懷かい郷きょうの悲しみを運んで来た。彼はその悲しみを払うために、そつと泥烏須デウス（神）の御名みなを唱えた。が、悲しみは消えな  
いばかりか、前よりは一層彼の胸へ、重苦しい空気を拵げ出した。

「この国の風景は美しい——。」

オルガンテイノは反省した。

「この国の風景は美しい。気候もまず温和である。土人は、——

あの黄面こうめんの小人こびとよりも、まだしも黒ん坊がましかも知れない。

しかしこれも大体の気質は、親しみ易いところがある。のみならず信徒も近頃では、何万かを数えるほどになった。現にこの首府のまん中にも、こう云う寺院が聳そびえている。して見ればここに住

んでいるのは、たとい愉快ではないにしても、不快にはならない筈ではないか？ が、自分はどうかすると、憂鬱の底に沈む事がある。リスポアの市へ帰りた<sup>まち</sup>い、この国を去りたいと思う事がある。これは懐郷の悲しみだけであろうか？ いや、自分はリスポアでなくとも、この国を去る事が出来さえすれば、どんな土地へでも行きたいと思う。支那<sup>しな</sup>でも、沙室<sup>シャム</sup>でも、印度<sup>インド</sup>でも、——つまり懐郷の悲しみは、自分の憂鬱の全部ではない。自分はただこの国から、一日も早く逃れたい気がする。しかし——しかしこの国の風景は美しい。気候もまず溫和である。……」

オルガンテイノは吐息<sup>といき</sup>をした。この時偶然彼の眼は、点々と木かげの苔<sup>こけ</sup>に落ちた、灰<sup>ほのじろ</sup>白い桜の花を捉<sup>とら</sup>えた。桜！ オルガンテ

イノは驚いたように、薄暗い木立ちの間を見つめた。そこには四五本の棕櫚の中に、枝を垂らした糸桜が一本、夢のように花を煙らせていた。

「御おんあるじ 主守らせ給え！」

オルガンテイノは一瞬間、降魔の十字を切ろうとした。実際の瞬間彼の眼には、この夕闇に咲いた枝垂桜が、それほど無気味に見えたのだった。無気味に、——と云うよりもむしろこの桜が、何故か彼を不安にする、日本そのもののように見えたのだった。が、彼は刹那の後、それが不思議でも何でもない、ただの桜だった事を発見すると、恥しそうに苦笑しながら、静かにまたもと来た小径へ、力のない歩みを返して行った。

×

×

×

三十分の後、<sup>のち</sup>彼は南蛮寺<sup>なんばんじ</sup>の内陣<sup>ないじん</sup>に、泥烏須<sup>デウス</sup>へ祈祷を捧げて  
 いた。そこにはただ<sup>まるでんじょう</sup>円天井<sup>えんてんじょう</sup>から吊るされたランプがあるだけ  
 だった。そのランプの光の中に、内陣を囲んだフレスコの壁には、  
 サン・ミグエルが地獄の悪魔と、モオゼの屍骸<sup>しがい</sup>を争っていた。が、  
 勇ましい大天使は勿論、<sup>たけ</sup>吼り立った悪魔さえも、今夜は<sup>おぼろ</sup>朧げな光  
 の加減か、妙にふだんよりは優美に見えた。それはまた事による  
 と、祭壇の前に捧げられた、<sup>みずみず</sup>水々しい<sup>ばら</sup>薔薇や<sup>えにしだ</sup>金雀花が、匂って

いるせいかも知れなかつた。彼はその祭壇の後に、じつと頭を垂れたまま、熱心にこう云う祈禱を凝らした。

「南無大慈大悲の泥烏須如来！ 私はリスポアを船出した時から、

一命はあなたに奉つて居ります。ですから、どんな難儀に遇つて

も、十字架の御威光を輝かせるためには、一步も怯まずに進んで

参りました。これは勿論私一人の、能くする所ではございません。

皆天地の御主、あなたの御恵でございます。が、この日

本に住んでいる内に、私はおおい私の使命が、どのくらい難い

かを知り始めました。この国には山にも森にも、あるいは家々の

並んだ町にも、何か不思議な力が潜んで居ります。そうしてそれ

が冥々の中に、私の使命を妨げて居ります。さもなければ私は



この頃のように、何の理由もない憂鬱の底へ、沈んでしまう筈は  
 ございますまい。ではその力とは何であるか、それは私にはわか  
 りません。が、とにかくその力は、ちょうど地下の泉のように、  
 この国全体へ行き渡つて居ります。まずこの力を破らなければ、  
 おお、南無大慈大悲の泥烏須如来！<sup>デウスによらい</sup> 邪宗<sup>じゃしゆう</sup>に惑溺<sup>わくでき</sup>した日本  
 人は波羅葦増<sup>はらいそ</sup>（天界<sup>てんがい</sup>）の莊嚴<sup>しようごん</sup>を拝する事も、永久にないか  
 も存じません。私はそのためにこの何日か、煩悶<sup>はんもん</sup>に煩悶を重ね  
 て参りました。どうかあなたの下部<sup>しもべ</sup>、オルガンテイノに、勇気と  
 忍耐とを御授け下さい。――」

その時ふとオルガンテイノは、鶏の鳴き声を聞いたように思つ  
 た。が、それには注意もせず、さらにこう祈祷の言葉を続けた。

「私わたくしは使命を果すためには、この国の山川やまかわに潜んでいる力と、

——多分は人間に見えない霊と、戦わなければなりません。あなた  
 たは昔紅海こうかいの底に、埃及エジプトの軍勢ぐんせいを御沈めになりました。こ  
 の国の霊の力強い事は、埃及エジプトの軍勢ぐんせいに劣りますまい。どうか古  
 の予言者のように、私もこの霊との戦に、………」

祈祷の言葉はいつのまにか、彼の唇くちびるから消えてしまった。今度  
 は突然祭壇のあたりに、けたたましい鶏鳴けいめいが聞えたのだった。

オルガンティノは不審そうに、彼の周囲を眺めまわした。すると  
 彼の真後まうしろには、白々しろしろと尾を垂れた鶏が一羽、祭壇の上に胸を  
 張ったまま、もう一度、夜でも明けたように鬨とぎをつくっているで  
 はないか？

オルガンテイノは飛び上るが早いか、アビトの両腕を拡げながら、倉皇そうこうとこの鳥を逐い出そうとした。が、二足三足踏み出したと思うと、「御主おんあるじ」と、切れ切れに叫んだなり、茫然とそこへ立ちすくんでしまった。この薄暗い内陣ないじんの中には、いつでもどこからはいって来たか、無数の鶏が充満している、——それがあるいは空を飛んだり、あるいはそこここを駈けまわったり、ほとんど彼の眼に見える限りは、鶏冠とさかの海にしているのだった。

「御主、守らせ給え！」

彼はまた十字を切ろうとした。が、彼の手は不思議にも、万まんり力きか何かはきに挟まれたように、一寸いっすんとは自由に動かなかつた。その内にだんだん内陣ないじんの中には、榎火ほたびの明りあかに似た赤光しゃっこうが、

どこからとも知れず流れ出した。オルガンテイノは喘ぎ喘ぎ、この光がさし始めると同時に、朦朧もうろうとあたりへ浮んで来た、人影があるのを発見した。

人影は見る間に鮮まかになつた。それはいずれも見慣れない、素そ朴ぼくな男女の一ひと群むれだつた。彼等は皆頸くびのまわりに、緒おにぬいた玉を飾りながら、愉快そうに笑い興じていた。内陣に群がった無数の鶏は、彼等の姿がはつきりすると、今までよりは一層高らかに、何羽も鬨とぎをつくり合つた。同時に内陣の壁は、——サン・ミグエルの画えを描かいた壁は、霧のように夜へ吞まれてしまった。その跡には、——

日本の Bacchanalia は、呆氣あっけにとられたオルガンテイノの前へ、

蜃気楼しんきろうのように漂つて来た。彼は赤い篝かがりの火影ほかげに、古代の服装をした日本人たちが、互いに酒を酌み交かわしながら、車座くるまざをつくつてゐるのを見た。そのまん中には女が一人、——日本ではまだ見た事のない、堂々とした体格の女が一人、大きな桶おけを伏せた上に、踊り狂つてゐるのを見た。桶の後ろには小山のように、これもまた逞たくましい男が一人、根こぎにしたらしい榊さかきの枝に、玉だの鏡だのが下さがつたのを、悠然と押し立ててゐるのを見た。彼等のまわりには数百の鶏が、尾羽根おぼねや鶏冠とさかをすり合せながら、絶えず嬉しそうに鳴いてゐるのを見た。そのまた向うには、——オルガンテイノは、今更のように、彼の眼を疑わずにはいられなかつた。——そのまた向うには夜霧の中に、岩屋いわやの戸らしい一枚岩が、どつ

しりと聳えているのだった。

桶の上ののつた女は、いつまでも踊をやめなかつた。彼女の髪を巻いた蔓は、ひらひらと空に翻つた。彼女の頸に垂れた玉は、何度も霰あられのように響き合つた。彼女の手にとつた小笹の枝は、縦横に風を打ちまわつた。しかもその露あられにした胸！ 赤い篝かがりび火の光の中に、艶つやつや々と浮うかび出た二つの乳房は、ほとんどオルガンのテイノの眼には、情欲そのものとしか思われなかつた。彼は泥デ烏ウ須スを念じながら、一心に顔をそむけようとした。が、やはり彼の体は、どう云う神秘のろいな呪の力か、身動きさえ楽には出来なかつた。その内に突然沈黙が、幻の男女たちの上へ降つた。桶の上に乗つた女も、もう一度正しやうき氣に返つたように、やっと狂わしい踊を

やめた。いや、鳴き競っていた鶏さえ、この瞬間は頸を伸ばしたまま、一度にひっそりとなつてしまつた。するとその沈黙の中に、永久に美しい女の声が、どこからか厳かに伝わつて来た。

「<sup>わたし</sup>私がここに隠<sup>こも</sup>つていれば、世界は暗闇になつた筈ではないか？  
それを神々は楽しそうに、笑い興じていると見える。」

その声が夜空に消えた時、桶の上にのつた女は、ちらりと一同を見渡しながら、意外なほどしとやかに返事をした。

「それはあなたにも立ち勝<sup>まさ</sup>つた、新しい神がおられますから、喜び合つておるのでございます。」

その新しい神と云うのは、泥烏須<sup>デウス</sup>を指しているのかも知れない。

——オルガンテイノはちよいとの間<sup>あいだ</sup>、そう云う気もちに励まされ

ながら、この怪しい幻の変化に、やや興味のある目を注いだ。

沈黙はしばらく破れなかつた。が、たちまち鶏の群むれが、一いっせい斉せいにとき鬨とぎをつくつたと思つたと、向うに夜霧を堰せき止めていた、岩屋の戸らしい一枚岩が、徐おもむろに左右へ開ひらき出した。そうしてその裂さけ目からは、言ごんく句くに絶した万ばんどう道の霞光かこうが、洪水のように漲みなぎり出した。

オルガンテイノは叫ぼうとした。が、舌は動かなかつた。オルガンテイノは逃げようとした。が、足も動かなかつた。彼はただ大光明のために、烈めまいしく眩暈めまいが起るのを感じた。そうしてその光の中に、大おおぜい勢せいの男女の歡喜する声が、澎ほうはい湃はいと天のぼに昇るのを聞いた。



「おおひるめむち  
大日靈貴！ 大日靈貴！ 大日靈貴！」

「新しい神などはおりません。新しい神などはおりません。」

「あなたに逆さからうものは亡びます。」

「御覧なさい。闇が消え失せるのを。」

「見渡す限り、あなたの山、あなたの森、あなたの川、あなたの町、あなたの海です。」

「新しい神などはおりません。誰も皆あなたの召使です。」

「大日靈貴！ 大日靈貴！ 大日靈貴！」

そう云う声の湧き上る中に、冷汗になったオルガンテイノは、何か苦しそうに叫んだきりとうとうそこへ倒れてしまった。……

：

その夜も三さん更こうに近づいた頃、オルガンテイノは失心の底から、やつと意識を恢復した。彼の耳には神々の声が、未だに鳴り響いているようだった。が、あたりを見廻すと、人ひと音おとも聞えない内な陣いじんには、円まる天井てんじようのランプの光が、さっきの通り朦朧もうろうと壁へ画きを照らしているばかりだった。オルガンテイノは呻うめき呻うめき、そろそろ祭壇うしろの後を離れた。あの幻にどんな意味があるか、それは彼にはのみこめなかつた。しかしあの幻を見せたものが、泥烏須デウスでない事だけは確かだった。

「この国の霊と戦うのは、……」

オルガンテイノは歩きながら、思わずそつと独り語ごとを洩こぼらした。「この国の霊と戦うのは、思ったよりもつと困難らしい。勝つか、

それともまた負けるか、——」

するとその時彼の耳に、こう云う囁きささやを送るものがあつた。

「負けですよ！」

オルガンテイノは気味悪そうに、声のした方を透すかして見た。が、そこには不相変あいかわらず、仄暗ほのぐらい薔薇や金雀花えにしだのほか、人影らしいものも見えなかつた。

×

×

×

オルガンテイノは翌日ゆうべの夕も、南蛮寺なんばんじの庭を歩いていた。し

かし彼の碧眼へきがんには、どこか嬉しそうな色があつた。それは今日  
いちにち  
一日の内に、日本の侍が三四人、奉教人ほうきようじんの列にはいったか  
らだつた。

庭の檝かんらん欒げっけいや月桂は、ひっそりと夕闇に聳えていた。ただそ  
の沈黙みだが擾みだされるのは、寺の鳩ほとが軒へ帰るらしい、中空なかぞらの羽音はおと  
よりほかはなかつた。薔薇ばいの匂におい、砂の湿り、——一切は翼のある  
天使たちが、「人の女子おみなごの美しきを見て、」妻を求めくだに降つて  
来た、古代の日の暮のように平和だつた。

「やはり十字架の御威光の前には、穢けがらわしい日本の霊の力も、  
勝利を占しめる事はむずかしいと見える。しかし昨夜ゆうべ見た幻は？——  
——いや、あれは幻に過ぎない。悪魔はアントニオしやうにん上人にも、

ああ云う幻を見せたではないか？ その証拠には今日になると、一度に何人かの信徒さえ出来た。やがてはこの国も至る所に、て主んしゅの御寺みでらが建てられるであらう。」

オルガンテイノはそう思いながら、砂の赤い小径こみちを歩いて行つた。すると誰か後から、そつと肩を打つものがあつた。彼はすぐに振り返つた。しかし後には夕明りが、径みちを挟んだ篠懸すずかけの若葉に、うつすりと漂ただよつていただけだつた。

「御主おんあるじ。守らせ給え！」

彼はこう眩つぶやいてから、徐ろおもむに頭かしらをもとへ返した。と、彼の傍かたわらには、いつのまにそこへ忍び寄つたか、昨夜の幻に見えた通り、頸くびに玉を巻いた老人が一人、ぼんやり姿を煙らせたまま、徐ろおもむに歩

みを運んでいた。

「誰だ、お前は？」

不意を打たれたオルガンテイノは、思わずそこへ立ち止まった。

「私は、——誰でもかまいません。この国の靈の一人です。」

老人は微笑を浮かべながら、親切そうに返事をした。

「まあ、御一緒に歩きましょう。私はあなたとしばらくの間、御話しするために出て来たのです。」

オルガンテイノは十字を切った。が、老人はその印に、少しも恐怖を示さなかった。

「私は悪魔ではないのです。御覧なさい、この玉やこの剣を。地獄の炎に焼かれた物なら、こんなに清浄ではない筈です。さあ、

もう呪文じゆもんなどを唱えるのはおやめなさい。」

オルガンテイノはやむを得ず、不愉快そうに腕組をしたまま、老人と一しよに歩き出した。

「あなたはてんしゆきよう天主教ひろうを弘めに來ていますね、——」

老人は静かに話し出した。

「それも悪い事ではないかも知れません。しかし泥烏須デウスもこの國へ來ては、きつと最後には負けてしまいますよ。」

「泥烏須デウスは全能の御主おんあるじだから、泥烏須に、——」

オルガンテイノはこう云いかけてから、ふと思いついたように、いつもこの国の信徒に対する、叮嚀ていねいな口調を使い出した。

「泥烏須デウスに勝つものはない筈です。」

「ところが実際はあるのです。まあ、御聞きなさい。はるばるこの国へ渡つて来たのは、泥烏須ばかりではありません。孔子、孟子、莊子、——そのほか支那からは哲人たちが、何人もこの国へ渡つて来ました。しかも当時はこの国が、まだ生まれただけの国です。支那の哲人たちは道のほかに、呉の国の絹だの秦の国の玉だの、いろいろな物を持って来ました。いや、そう云う宝よりも尊い、れいみょう靈みょう妙な文字さえ持つて来たのです。が、支那はそのために、我々を征服出来たでしょうか？ たとえば文字を御覧なさい。文字は我々を征服する代りに、我々のために征服されました。私が昔知っていた土人に、柿の本の人麻呂と云う詩人があります。その男の作った七夕の歌は、今でもこの国に残つ



ていますが、あれを読んで御覧なさい。牽牛織女けんぎゆうしよくじよはあの中に見出す事は出来ません。あそこに歌われた恋人同士は飽くまでも彦星ひこほしと棚機津女たなばたつめとです。彼等の枕に響いたのは、ちようどこの国の川のように、清あまい天がわの川せおとの瀬音せおとでした。支那の黄河こがや揚よう子江こうに似た、銀河ぎんがの浪音なみねではなかつたのです。しかし私は歌の事より、文字の事を話さなければなりません。人麻呂はあの歌を記すために、支那の文字を使いました。が、それは意味のためより、発音のための文字だったので。舟しゅうと云う文字がはいつた後のちも、「ふね」は常に「ふね」だったので。さもなければ我々の言葉は、支那語になつていたかも知れません。これは勿論人麻呂よりも、人麻呂の心を守つていた、我々この国の神の力です。の

みならず支那の哲人たちは、書道をもこの国に伝えました。空くうか

海、道風どうふう、佐理さり、行成こうせい——私は彼等のいる所に、いつも人

知れず行っていました。彼等が手本にしていたのは、皆支那人の

墨蹟ぼくせきです。しかし彼等の筆先ふでさきからは、次第に新しい美が生れ

ました。彼等の文字はいつのまにか、王羲之おうぎしでもなければ褚遂ちよ

良すいりようでもない、日本人の文字になり出したのです。しかし我

々が勝ったのは、文字ばかりではありません。我々の息吹いぶきは潮

風おかぜのように、老儒ろうじゆの道みちさえも和やわらしました。この国の土人に尋

ねて御覧なさい。彼等は皆孟子もうしの著書は、我々の怒いに触ふれ易やすいた

めに、それを積んだ船があれば、必ず覆くつがえると信じています。科戸しなと

の神はまだ一度も、そんな悪戯いたずらはしていません。が、そう云う

信仰の中にも、この国に住んでいる我々の力は、臃おぼろげながら感じられる筈です。あなたはそう思いませんか？」

オルガンテイノは茫然と、老人の顔を眺め返した。この国の歴史に疎うとい彼には、折角せっかくの相手の雄弁も、半分はわからずにしまつたのだつた。

「支那の哲人たちの後のちに来たのは、印度インドの王子悉達多したあるたです。――

老人は言葉を続けながら、径みちばたの薔薇ばらの花をむしると、嬉しそうにその匂かを嗅いだ。が、薔薇はむしられた跡にも、ちゃんとその花が残っていた。ただ老人の手にある花は色や形は同じに見えても、どこか霧のように煙っていた。

「仏陀ぶつだの運命も同様です。が、こんな事を一々御話するのは、

御退屈を増すだけかも知れません。ただ気をつけて頂きたいのは、

本地垂跡ほんじすいじやくの教の事です。あの教はこの国の土人に、大日靈おおひるめむ

貴ちは大日如来だいにちにょらいと同じものだと思わせました。これは大日靈

貴の勝でしょうか？ それとも大日如来の勝でしょうか？ 仮り

に現在この国の土人に、大日靈貴は知らないにしても、大日如来

は知っているものが、大勢あるとして御覧なさい。それでも彼等

の夢に見える、大日如来の姿の中うちには、印度仏ぶつの面影おもかげよりも、

大日靈貴が窺うかがわれはしないででしょうか？ 私は親鸞わたし しんらんや日蓮にちれんと

一しよに、沙羅双樹さらそうじゆの花の陰も歩いていきます。彼等が随喜渴仰ずいきかつごう

した仏ほとけは、円光のある黒人こくじんではありません。優しい威嚴いげんに充ち

満ちた上じょうぐうたいし宮太子などの兄弟です。——が、そんな事を長々と御話しするのは、御約束の通りやめにしましょう。つまり私が申上げたいのは、泥烏須デウスのようにこの国に来て、勝つものはないと云う事なのです。」

「まあ、御待ちなさい。御前おまえさんはそう云われるが、——」  
オルガンテイノは口を挟はさんだ。

「今日などは侍が二三人、一度に御教おんおしえに帰依きえしましたよ。」  
「それは何人なんにんでも帰依するでしょう。ただ帰依したと云う事だけならば、この国の土人は大部分悉達したあるた多の教えに帰依していません。しかし我々の力と云うのは、破壊する力ではありません。造り変える力なのです。」

老人は薔薇の花を投げた。花は手を離れたと思うと、たちまち夕明りに消えてしまった。

「なるほど造り変える力ですか？　しかしそれはお前さんたちに限った事ではないでしょう。どこの国でも、——たとえば希臘ギリシヤの神々と云われた、あの国にいる悪魔でも、——」

「大いなるパンは死にました。いや、パンもいつかはまたよみ返るかも知れません。しかし我々はこの通り、未だに生きているのです。」

オルガンティノは珍しそうに、老人の顔へ横眼を使った。

「お前さんはパンを知っているのですか？」

「何、西さい国こくの大名の子たちが、西洋から持って帰ったと云う、

横文字の本にあつたのです。——それも今の話ですが、たといこ

の造り変える力が、我々だけに限らないでも、やはり油断はなりませんよ。いや、むしろ、それだけに、御気をつけなさいと云いたいのです。我々は古い神ですからね。あの希臘ギリシャの神々のように、世界の夜明けを見た神ですからね。」

「しかし泥鳥デウス須は勝つ筈です。」

オルガンテイノは剛情に、もう一度同じ事を云い放つた。が、

老人はそれが聞えないように、こうゆっくり話し続けた。

「私はわたしつい四五日前まえ、西国さいこくの海辺うみべに上陸した、希臘ギリシャの船乗りあに遇あいました。その男は神ではありません。ただの人間に過ぎないのです。私はその船乗と、月夜の岩の上に坐りながら、いろいろ

ろの話を書いて来ました。目一つの神につかまった話だの、人を  
豚いのこにする女神めがみの話だの、声の美しい人魚にんぎよの話だの、——あなた  
はその男の名を知っていますか？ その男は私に遇あつた時から、  
この国の土人になりました。今では百合若ゆりわかと名乗っているそうで  
す。ですからあなたも御気をつけなさい。泥烏須デウスも必ず勝つとは  
云われません。天主てんしゆきよう教はいくら弘ひろまっても、必ず勝つとは云  
われません。」

老人はだんだん小声になった。

「事によると泥烏須デウス自身も、この国の土人に変るでしょう。支那  
や印度も変つたのです。西洋も変らなければなりません。我々は  
木々の中にもいます。浅い水の流れにもいます。薔薇ばらの花を渡る



風にもいます。寺の壁に残る夕明ゆうあかりにもいます。どこにでも、  
またいつでもいます。御気をつけなさい。御気をつけなさい。：  
……」

その声がとうとう絶えたと思うと、老人の姿も夕闇の中へ、影  
が消えるように消えてしまった。と同時に寺の塔からは、眉をひ  
そめたオルガンテイノの上へ、アヴェ・マリアの鐘が響き始めた。

×

×

×

南蛮なんばんじ寺のピアドレ・オルガンテイノは、——いや、オルガン

テイノに限った事ではない。悠々とアビトの裾すそを引いた、鼻の高  
い紅毛人こうもうじんは、黄昏たそがれの光の漂ただよった、架空かくうの月桂げっけいや薔薇ばらの中か  
ら、一双の屏風びょうぶへ帰って行つた。南蛮船なんばんせん入津にゆうしんの図かを描い  
た、三世紀以前の古屏風へ。

さようなら。パアドレ・オルガンテイノ！ 君は今君の仲間と、  
日本の海辺うみべを歩きながら、金泥きんていの霞かすみに旗を挙げた、大きい南蛮  
船を眺めている。泥烏須デウスが勝つか、大日靈貴おおひるめむちが勝つか——それ  
はまだ現在でも、容易よういに断定だんていは出来ないかも知れない。が、や  
がては我々の事業が、断定を与うべき問題である。君はその過去  
の海辺から、静かに我々を見てい給え。たとい君は同じ屏風の、  
犬を曳ひいた甲比丹カピタンや、日傘をさしかけた黒ん坊の子供と、忘却の

眠に沈んでいても、新たに水平へ現れた、我々の黒船くろふねの石火矢いしびやの音は、必ず古めかしい君等の夢を破る時があるに違いない。それまでは、——さようなら。パアドレ・オルガンテイノ！ さようなら。南蛮寺のウルガンバテレン伴天連！

（大正十年十二月）



# 青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集4」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年1月27日第1刷発行

1993（平成5）年12月25日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j.utiyama

校正：かとうかおり

1998年12月19日公開

2004年3月10日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 神神の微笑

芥川龍之介

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>